

妊婦のパーソナリティ分析とつわり発症の関連性について

福岡大学医学部産婦人科学教室

*福岡大学医学部精神科学教室

**福岡大学医学部衛生学教室

***福岡大学病院看護部

瓦林達比古 堤 啓* 渡辺 大介** 皿田 洋子*
 松尾 直裕 谷 泰子*** 古賀ゆかり*** 白川 光一

Analysis of Relationship between Personality and Emesis
 Gravidarum in Pregnant Women

Tatsuhiko KAWARABAYASHI, Satoshi TSUTSUMI*, Daisuke WATANABE**,
 Yoko SARADA*, Naohiro MATSUO, Yasuko TANI***,
 Yukari KOGA*** and Koichi SHIRAKAWA

Department of Obstetrics and Gynecology, School of Medicine Fukuoka University, Fukuoka

**Department of Psychiatry, School of Medicine, Fukuoka University, Fukuoka*

***Department of Hygiene, School of Medicine, Fukuoka University, Fukuoka*

****Department of Nursing, Fukuoka University Hospital, Fukuoka*

概要 妊婦のパーソナリティタイプとつわり症状の重症度との関係を解析することを本研究の目的とした。パーソナリティ分析には妊娠初期および中期にキャッテル・パーソナリティテスト（西園修正版）を用い、つわりは悪心や嘔吐の持続期間と程度により強い群（35人）、弱い群（41人）、無い群（19人）の3群に分別した。パーソナリティタイプは循環気質であるAから分裂気質であるEまで5型に分類したが、つわりの程度との間には有意な相関はみられなかった。しかしながら、その中の構成因子である対人態度、特に社交性および支配性に有意差が認められた。すなわち、社交的な態度を好む傾向があるにもかかわらず、人からの反対に対抗的になり、願望通りことが運ばないと自信を失いやすく、心から真に人に気持ちを預けて欲求不満を癒すことができにくい妊婦は、内心の葛藤を身体言語として表現した強いつわり症状を呈することが判明した。したがって、そのような妊婦に対しては、つわりの症状を妊娠に伴う当然の身体症状でしかもつわりの出やすい体質であるというような説明をするのではなく、このようなパーソナリティの不統合性に対するカウンセリングの必要性も示唆された。

Synopsis The relationship between personality types and the symptoms of emesis gravidarum in pregnant women was analyzed by means of the Cattell personality test (revised by Nishizono) performed in early and mid pregnancy. Personality types were classified into five from cyclothymia A to schizothymia E. As for emesis, the patients were also classified into three groups, severe (35), mild (41) and none (19), according to the severity and duration of the symptoms. As a result, there was no significant difference between the types and the symptoms, but significant differences were seen in interpersonal attitudes, especially in sociality and dominative propensity, which were constituents of the personality type. The results of the analysis suggested that the patients who revealed disunification tended to express strong emesis as a somatic language. These results therefore indicate the necessity for counseling about personality without simply explaining it as their predisposing constitution, when we encounter strongly emetic pregnant women.

Key words: Emesis gravidarum • Personality analysis • Cattell personality test

緒言

妊婦のつわり症状は、程度に差はあっても大多数に認められるものであり、一般的には妊娠進行に伴って自然に軽快するため放置されることが多い。この妊娠に伴う悪心や嘔吐などのつわり症状は、歴史的には現在までに、内分泌説¹⁾、ホルモン説²⁾、中毒説³⁾⁴⁾、さらにはアレルギー説⁵⁾などさまざまな病因論から説明が試みられてきた。しかしながら、妊娠した他の動物は嘔吐しないこと、妊婦のすべてが嘔吐する訳ではないこと、しかも妊娠中に嘔吐する者によっては必ずしもこれらの説では説明できないことなどから、今日では精神身体医学的な原因論の解析も進められてきている。それらは、妊婦の自我状態の変化や、精神面からの適応性や情緒的健康面から論じられ、妊娠に伴

う精神科的障害に焦点が当てられることが多かった^{6)~8)}。なかでも Bibring⁹⁾は、パーソナリティの恒常性の障害が妊娠によってもたらされて、その不統合性がゆえに一時的情緒障害が生じると指摘している。ところが我々の知る限りでは、パーソナリティとつわりの愁訴との関連性や、さらにパーソナリティの構成要素とつわりとの関連性まで分析した研究は見当たらない。そこで、本研究では妊娠特有の症状であるつわりと妊婦のパーソナリティとの関連性について解析を試み、今後の妊婦管理の一助とすることを目的とした。

研究対象および方法

対象は平成4年に福岡大学病院産婦人科を受診し、本研究への参加に同意の得られた109人の妊婦(初産婦50人、経産婦59人)のうち、キャッセル・

表1 パーソナリティプロフィール表

(a-b) 点	気質循環	偏執現実肯定的	支配性的	社交性的	考え進歩的	気分高潮	感情安定	感受性鈍感	不安弱い	緊張弱い	自我力強い	自立性積極的	成熟度健康な超自我	意志強固	知能聡明
	5														
4															
3															
2															
1															
0															
-1															
-2															
-3															
-4															
-5															
c 点	分裂	偏執的	服従的	回避的	保守的	低潮	不安定	敏感	強い	強い	神経症的	依存	未熟	薄弱	低格

パーソナリティテスト（西園修正版）を完成できた95人（87.2%）である。年齢は17歳から42歳に及び、平均30.3歳であった。このパーソナリティテストは、外来受診時、待ち合い時間に、妊娠初期および妊娠中期の2回施行した。一方、各妊婦のつわりについては、妊娠初期の妊婦の自覚症状および来院時の訴えを中心に、つわりによる不調のため、日常生活全般に支障を来し、家事、仕事に十分できないことが多い者をつわりの強い群（35人）、つわりによる不調はあるが、日常生活全般に支障を来すほどではなく、家事、仕事は不十分ながらこなせる者をつわりの弱い群（41人）、また、つわりが全く無いかほんの少しだけで、日常生活全般において特に問題点は無く、普段と変わらぬ生活ができている者をつわりの無い群（19人）として3群に分類し、それらの3群間に本パーソナリティテストによりどのような特性の違いがみられるのかを検索した。

キャッテル・パーソナリティテスト（西園修正版）では、気質、偏執、支配性、社交性、考え方、気分、感情、感受性、不安、緊張、自我力、自立性、成熟度、意志、知能の15因子（下位因子）を分析するものである。表1にみられるように、各

因子項目は、最高点5、最低点-5であり、例えば気質を取り上げると、5に近いほど循環気質であり、-5に近いほど分裂気質と捕えられる。これらの15因子のうち知能を除く14因子を組合せて四つの上位因子：気質（気質、偏執）、自我機能（自我力、自立性、成熟度、意志）、対人態度（支配性、社交性、考え方、気分）、情緒（感情、感受性、不安、緊張）にまとめている。そして、表2にみられるように、それぞれの上位因子の得点の組合せによって、性格のタイプをA、B、C、D、Eの5型に分けている。Aタイプは循環気質、現実肯定的であり自律性もあり、意志も強く、社会に対しても積極的に情緒的に安定したタイプである。以下、その傾向を四つの上位因子の得点の減少と組合せによって、Bタイプ、Cタイプ、……と変化して行くように作られている。Eタイプは分裂気質、偏執性であり、自律性に乏しく、内閉的で情緒的に不安定なタイプである。このような方法で、それぞれの妊婦のパーソナリティ分析を施行した。なお、有意差の検定にはスチューデントtテストを用いた。

表2 パーソナリティタイプ

因子		タイプ				
		A	B	C	D	E
気質	気質 偏執	+	+	+ or -	-	-
自我機能	自我力 自立性 成熟度 意志	+	+	- or +	-	-
対人態度	支配性 社交性 考え方 気分	+	- or +	?	+ or -	-
情緒	感情 感受性 不安 緊張	+	+ or -	?	- or +	-

+：各カテゴリー内得点合計が0以上のもの

-： // 0以下のもの

?： // 0以上、以下をとわない

表3 つわりとパーソナリティタイプ

妊娠初期			
タイプ	つわり強	つわり弱	つわり無
A	11(31.4%)	16(39.0%)	10(52.6%)
B	14(40.0%)	14(34.1%)	5(26.3%)
C	10(28.6%)	11(26.8%)	3(15.8%)
D	0	0	0
E	0	0	1(5.3%)
計	35	41	19
有意差無し			
妊娠中期			
タイプ	つわり強	つわり弱	つわり無
A	19(54.3%)	15(36.6%)	11(61.1%)
B	7(20.0%)	17(41.5%)	4(22.2%)
C	9(25.7%)	8(19.5%)	2(11.1%)
D	0	0	0
E	0	1(2.4%)	1(5.6%)
計	35	41	18
1名パーソナルテスト未記入 有意差無し			

表4 妊娠初期の上位因子

	気質	自我機能	対人態度	情緒
つわり強 (35人)	4.5±2.7	7.2±6.7	2.3±6.2	1.8±5.7
つわり弱 (41人)	5.0±2.2	6.8±7.5	1.6±6.2	2.4±5.7
つわり無 (19人)	4.3±2.9	7.4±6.9	5.6±7.8	2.5±6.0

Mean±SD
有意差無し

表5 妊娠中期の上位因子

	気質	自我機能	対人態度	情緒
つわり強 (35人)	4.4±2.9	8.1±6.0	2.6±6.4	3.4±4.8
つわり弱 (41人)	5.0±3.0	6.8±5.8	1.1±6.3	2.9±5.9
つわり無 (18人)	4.8±2.6	8.9±7.5	4.8±6.7	3.3±4.9

Mean±SD
有意差無し

研究成績

表3にみられるように、妊娠初期と妊娠中期の両期において、つわりの程度とパーソナリティタイプA～Eとの間には有意な相関はみられなかった。しかしながら、つわりが無いが、弱い群においては、妊娠初期にAタイプかAタイプに近い傾向を示した。次いで表4に示す妊娠初期の上位因子をみると、気質、自我機能ではつわりに関する3群ともほぼ同じ得点を示したが、情緒得点において、つわりの強い群は他の2群に比べてやや低い傾向を示した。ここで最も特徴的なことは、有意差は無かったものの、対人態度においてつわりの弱い群(1.6)、強い群(2.3)、無い群(5.6)の順番に得点が高くなったことであった。

次に、母性の確立が進行していると考えられる妊娠中期の結果をみると、表3に示すように、つわりの強い群と無い群は共にAタイプが増える傾向がみられるが、逆に、つわりの弱い群ではわずかではあるがAタイプが減少しBタイプが増加した。表5の上位因子をみると、いずれも有意差は無いが、つわりの弱い群は気質のみ他の2群よりわずかに高い得点を示したが、自我機能、対人態度、情緒のいずれも低得点を示した。

表6 妊娠初期および中期の下位因子

妊娠初期		支配性
つわり強 (35人)	0.2±2.2	} *
つわり弱 (41人)	-0.8±2.0	
つわり無 (19人)	0.8±2.9	

* p<0.05
Mean±SD

妊娠中期		社交性
つわり強 (35人)	1.5±2.6	} -1.2±2.6 *
つわり弱 (41人)	0.9±2.8	
つわり無 (18人)	2.9±2.5	

* p<0.05
Mean±SD

特に対人態度においてその傾向が強く、つわりの無い群4.8、強い群2.6に対して、弱い群は1.1であった。

そこで、表6にみられるように、パーソナリティの下位因子とつわりの程度との関連をさらに検討した結果、妊娠初期では対人態度の下位因子である支配性につわりの弱い群のみ有意差がみられること、妊娠中期では対人態度の下位因子である社交性に全体的なつわりの有り無しおよび弱い群と無い群で有意差があることが明らかになった。

考察

1. 妊娠初期におけるつわりの程度とパーソナリティ

この時期は、妊婦ことに初産婦は妊娠体験という一種の危機⁹⁾の中にあり、妊娠したことの心理的受け止め方、新たに身ごもった赤ん坊にとって母親になることへの態度、妊娠したことに対する周囲の重要な人物との関係などが問題になると考えられる。したがって、つわり症状の持つ意味をこのような観点から考察することが必要になってくる。

支配性の項目では、他人に反対された場合の反応、願望通りにことが進まぬ時の態度、仲間の中

でリーダーになれない状況での態度をみている。他人に反対された場合、つわりの強い群は対抗的な反応を示す者が多いが、逆に弱い群は意気阻喪する反応を示す者が多くみられ、両者の間に有意差 ($p < 0.05$) が認められた。つわりの無い群も、強い群と同程度に対抗的な反応を示し、弱い群との間に有意差が認められた。この結果から、反対され対抗的になるか意気阻喪するかを表面的に評価するだけでなく、他の要因と考え合せてパーソナリティを評価する必要性があることが示唆された。

次に、願望通りことが進まない時の妊婦の態度については、つわりの強い群の方が弱い群より比較的自信を無くす傾向が強い。また、つわりの無い群は他の2群と異なり怒りっぽくなる者が多く、欲求挫折に対する態度が全く異なった。つわりの無い群と強い群との間には欲求挫折の態度の現われ方に有意差 ($p < 0.05$) がみられ、無い群は外向的で、強い群は内向的であるといえる。また、自分が中心になれないと、3群とも人にいわれた通りにする態度を示した。しかしながらその程度は、つわりの弱い群が -0.8 で最も人に合せることが多く、次いで強い群で -0.6 であった。つわりの無い群は -0.4 で、最も人に合せることが少なくなっていて、弱い群との間に有意差 ($p < 0.05$) が認められた。以上の結果から、妊娠前期の3群のパーソナリティ特徴をみると、対人態度の項目に有意な違いが認められた。つまり、つわりの強い群は、1) 他人に反対されると対抗的になる他罰的傾向があり、2) 計画通りことが進まないとい内向的になり、3) 自分が中心になれないとある程度人のいうことに合せる特徴があり、他罰的傾向と内向性の不釣り合いな組合せとなった。これは人間関係の不安定さを示していると思われ、妊娠のこの時期、自信を失いやすく、人からの反対に対抗的になるが、思い通りになれないとそれを癒す為に人の機嫌を窺い、迎合的になる傾向を持っていると考えられる。心から人に気持ちを預けにくい傾向を秘めている為に、強いつわりという身体言語で妊娠にまつわる葛藤を伝えなければならないのであろう。

つわりの弱い群は、1) 人に反対されると意気阻喪してやや自罰的傾向を持ち、2) 計画通りことが進まないとい内向的になり、3) 自分が中心になれないと3群の中では比較的人にいわれた通りにする傾向が強い。すなわち、妊娠のこの時期において、控えめで自信を無くしても内省的であり、思い通りになれないとそれから抜け出す為に人の意見を取り入れようとする傾向を持っていると考えられる。そのため身体言語としてのつわりも軽くて済むのであろう。

つわりの無い群は、1) 他人に反対されると対抗的になる他罰的傾向があり、2) 計画通りにことが進まなくてもその挫折感を外向的な形で表現でき、3) 自分が中心になれなくても、3群の中では最も人にいわれた通りにしなくても済む者が多いといえる。つまり、楽観的に振舞えて、欲求挫折にも内向的にならずにむしろ外向的にそれを処理し、自分が中心になれなくても比較的人にいわれたことにこだわらず済ませることが出来る傾向を持っているといえよう。

2. 妊娠中期におけるつわりの程度とパーソナリティ

この時期になると、胎動の自覚も強くなってきて母性もかなり芽生え、妊娠も夫との日常生活の中で確実に受容されてくる。社交性の項目では、1) 人前に出ることや目立つことに対する態度、2) 異性との関係、3) スポーツや娯楽の選び方をみているが、全体的につわりの有る群と無い群との間に有意差 ($p < 0.05$) が認められ、その内容については次のように考えることができた。つまり、1) に対してはつわりの強い群はわずかにではあるが気楽にやれる。しかし弱い群はそのことを苦痛に感じる傾向があり、他方つわりの無い群はむしろ気楽にやれると捕えており、両群間には有意差 ($p < 0.05$) が認められた。2) については3群とも気楽に付き合えると答えているが、その中でもつわりの無い群が 0.7 の値を示し、他の2群の 0.2 より有意 ($p < 0.05$) に高値を示した。3) については、つわりの強い群はどちらかといえばチームプレーを好むと答えた者が多いが、弱い群は逆に個人技を好む者が多かった。他方つわりの無い群では圧

倒的にチームプレーを好む者が多く、弱い群と比較すると有意差 ($p < 0.05$) がみられた。

総 括

1. 社会的な態度を好む傾向があるにもかかわらず、人からの反対に対抗的になり、願望通りことが運ばないと自信を失いやすく、心から人に気持ちを預けて欲求不満を癒すことができにくい妊婦は、内心の葛藤を身体言語として表現した強いつわり症状を呈する。

2. 社交性をあまり好まず、人に反対されると自罰的になり内省的かつ控えめで、欲求不満も人の意見を取り入れて解消しようとする傾向のある妊婦はつわり症状も弱くて済む。

3. 本来社会的であり、人の反対に他罰的になり、しかも欲求不満に対しても外向的態度で処理できる楽観性を備え、人からいわれたことにこだわらずに済ませることができる妊婦はつわりが無い。

つまり、他罰的でありながら、欲求不満に直面すると自信を失い内向的になる不釣り合いな組合せを持つ妊婦は人間関係も不安定であり、それゆえに、心を率直に開くことができにくい傾向にある妊婦が強いつわり症状を呈してくるといえよう。このパーソナリティの不統合性は、Bibring⁹⁾の指摘とも一致した。

今回の結果から、つわりの程度と基本的なパーソナリティタイプの間には明らかな相関はみられなかったが、つわりは妊娠に伴う心身の変化や重要な人物との心理的關係にまつわる不安や葛藤を伝えようとする身体言語として全体的に捕えることができるということが示唆された。したがって、つわりの強い妊婦に対しては、つわりの症状を妊

娠に伴う当然の身体症状で、しかもつわりの出やすい体質であるというような単純な理解や説明をするのではなく、周囲の重要な人物との人間関係の状況、欲求挫折に際しての妊婦自身の対応の仕方などにも注目し、必要と思われる家族関係への介入や妊婦へのカウンセリングも考慮しなければならない。今後このような妊婦に遭遇した場合、精神科医との協同診療も積極的に行うべきであると考えらる。

文 献

1. *Bazan J, Dutrotsky R.* Treatment of vomiting in pregnancy. *Semana Med* 1943; 50: 221
2. *Peckham CH.* Observations of 60 cases of hyperemesis gravidarum. *Am J Obstet Gynecol* 1929; 17: 776—788
3. *Stander HJ.* Toxemias of pregnancy. *Medicine* 1929; 8: 158
4. *Hughes WL, Martin AC.* Treatment of hyperemesis gravidarum with intramuscular injections of husband's blood. *Am J Obstet Gynecol* 1942; 44: 103
5. *Finch JW.* Nausea and vomiting following the administration of diethylstilbestrol. *JAMA* 1942; 119: 401
6. *Hooke JF, Marks PA.* MMPI characteristics of pregnancy. *J Clin Psychol* 1962; 18: 316—317
7. *Cutma CE.* Causal attributions and perinatal depression. *J Abnorm Psychol* 1983; 92: 161—172
8. *Campbell EA.* Neurotic disturbance in pregnancy—A review. *Psychol Devel* 1988; 4: 311—328
9. *Bibring GL.* Some considerations of the psychological processes in pregnancy. *Psychoanal Study Child* 1959; 14: 113—121

(No. 7617 平7・2・10受付)